

不死の薬

小川未明

青空文庫

ある夏の夜でありました。三人の子供らが村の中にあつた大きなかしの木の下に集まつて話をしました。昼間の暑さにひきかえて、夜は涼しくありました。ことにこの木の下は風があつて涼しゆうございました。

赤く西の山に日が沈んでしまつて、ほんのりと紅い雲がいつまでも消えずに、林の間に残つていましたが、それすらまつたく消えてしまいました。夜の空は深い沼の中をのぞくように青黒く見えました。そのうちに、だんだん星の光がたくさんになつて見

えてきました。

「さあ、またなにかおとぎ噺をしようよ。」

と乙がいました。

「今日は丙の番だよ。」

と甲がいました。

この三人は同じ村の小学校へいつている、同じ年ごろの少年で、いたって仲がよく、いろいろの遊びをしましたが、この夏の晩には、このかしの木の下にきて、自分らが聞いたり、覚えていたりしているいろいろのおとぎ噺をしようと遊んでいました。

このとき、かしの木の葉が、さらさらといつて、青黒いガラスのような空で鳴りました。三人はしばらく黙つていましたが、

乙が丙に向かつて、

「さあ君、なにか話してくれたまえ。」

といいました。

三人の中のもつとも年下の丙は、空を見て考えていました。

このとき、遠く北の方の海で汽笛の音がかすかに聞こえたのでありました。三人はまたその音を聞いて心の中でいろいろの空想にふけりました。

「さあ話すよ。」

と丙はいった。そのりこうそうな黒いかわいらしい目に星の光がさしてひらめきました。

「ああ、聞くよ、早く話したまえ。」

と甲も乙もいいました。

丙は、つぎのような話をしました。……

昔、支那に、ある天子さまがあつて、すべての国をたいらげら

れて、りっぱな御殿を建てて、榮譽・栄華な日を送られました。

天子さまはなにひとつ自分の思うままにならぬものもなければ、

またなにひとつ不足というものもないにつけて、どうかしてでき

得ることなら、いつまでも死なずに、千年も万年もこの世に生

きていたいと思われました。けれど、昔から百年と長くこの世の

中に生きていたものがありませんので、天子さまはこのことを、

ひじょうに悲しまれました。

そこであるとき、巫女を呼んで、どうしたら自分は長生きがで

きるだろうかと問とわれたのであります。巫女みこは秘術ひじゆつをつくして
 天てんの神かみさまにうかがいをたてました。そしていいましたのには、
 これから海うみを越こえて東ひがしにゆくくにと国くにがある。その国くにの北きたの方ほうに金きん
 峰せん仙せんという高たかい山やまがある。その山やまの嶺みねのところに、自然しぜんの岩いわで
 できた盃さかずきがある。その盃さかずきは天てんに向むいてささげられてある。星ほしが夜よ
 るよる々々にその山やまの嶺みねを通とおるときに、一滴てきの露つゆを落おとしてゆく。その
 露つゆが千ねん年ねん、万まん年ねんと、その盃さかずきの中なかにたたえられている。この清きよら
 かな水みずを飲のむものは、けっして死しなない。それは世よにもまれな、
 すなわち不ふ死しの薬くすりである。これをめしあがれば、けっして死しとい
 うことことはないと、天子てんしさまに申もうしあげたのであります。

一一

「君！ 金峰仙^{きんぷせん}つて、あの山^{やま}かい。」

と、乙^{おつ}は、あちらに見^みえる山^{やま}の方^{ほう}を指^さして丙^{へい}に問^といました。

「ああ、あの山^{やま}だつて、死^しんだおじいさんがいつたよ。」

と丙^{へい}が答^{こた}えました。

「君^{きみ}はその話^{はなし}をおじいさんから聞^きいたのかい。」

と甲^{こう}が問^といました。

「ああ。」

と、丙^{へい}は軽^{かる}くそれに答^{こた}えて、また話^{はなし}を続^{つづ}けました。

天子^{てんし}さまは家来^{けらい}をお集^{あつ}めになつて、だれかその薬^{くすり}を取^とつてきて

くれるものはないかと申もうされました。みなのもは顔かおを見合みあわし
 て容易よういにそれをお受うけいたすものがありません。するとその中なかに
 ひとりひとりととと一人ひとりの年老としとつた家来けらいがありました、私わたくしがまいりますと申もうし出でまし
 た。天子てんしさまは、日ひごろから忠義ちゆうぎの家来けらいでありましたから、そ
 んなら汝なんじにその不ふ死しの薬くすりを取りとにゆくことを命めいずるから、汝なんじは東
 の方ほうの海うみを渡わたつて、絶海ぜっかいの孤島ことうにゆき、その国くにの北ほつ方ほうにある
 金峰仙きんぷせんに登のぼつて、不ふ死しの薬くすりを取りと、つつがなく帰かえつてくるよう
 にと、くれぐれもいわれました。

その老臣ろうしんは、謹つつしんで天子てんしさまの命めいを奉ほうじて、御前ごぜんをさがり、
 妻子さいし・親族しんぞく・友人ゆうじんらに別わかれを告つげて、船ふねに乗のつて、東ひがしを指さし
 て旅立たびだちいたしましたのであります。その時じ分ぶんには、まだ汽船きせんな

どというものがなかつたので、風のまにまに波の上を漂つて、夜も昼も東を指してきたのでありました。

老臣は船の上で、夜になれば空の星影を仰いで船のゆくえを知り、また朝になれば太陽の上るのを見てわずかに東西南北をわきまえたのであります。そのほかはなにひとつ目に止

まるものもなく、どこを見ても、ただ茫茫とした青海原でありました。あるときは風のために思わぬ方向へ船が吹き流され、あるときは波に揺られて危うく命を助かり、幾月も幾月も海上に漂つていましたが、ついにある日のこと、はるか波間に島が見えたので大いに喜び、心を励ましました。

その家来は島に上がりますと、思つたよりも広い国でありまし

た。そこでその国の人に向かつて金峰仙という山はどこにあるかといつて尋ねましたけれど、だれひとりとして知^しっているものがなかつたのです。

その時分は^{じぶん}大昔^{おおむかし}のことで、まだこの辺りにはあまり住^すんでいるものもなく、路^{みち}も開^{ひら}けてい^なかつたのであり^ました。家来^{けらい}は幾^{いくねん}年^{ねん}となくその国^{くに}じゆうを探^{さが}して歩^{ある}きました。そして、ついにこの国^{くに}にきて、金峰仙^{きんぶせん}という山^{やま}のあることを聞^きいて、艱難^{かんなん}を冒^{おか}して、その山^{やま}にのぼりました。

「そんな年^{とし}老^らつた家来^{けらい}が、どうしてあんな高^{たか}い山^{やま}にのぼつたのだい。」

と甲^{こう}が不思議^{ふしぎ}そうにして丙^{へい}に問^といました。

「ほんとうに、あの山へはだれも上れたものがないというよ。」
と乙は声をそろえていいました。

「いつであつたか、探検隊が登つて、そのうちで落ちて死んだものがあつたらう。それからだれも登つたものがないだらう。」
と甲がいいました。

「だけれど、その家来はいつしよけんめいになつて、登つたんだつて、おじいさんがいったよ。」
と丙がいいました。

「そうかい。それからどうなつたい。」
と熱心に乙と甲の二人が問いました。丙はまた語り続けました。
山へ登ると、巫女がいったように石の盃がありました。そして

その中に清らかな水がたまっていました。家来は携えてきた小さな徳利の中にその水を入れました。そして早くこれを携えて、国へもどつて天子さまにさしあげようと思つて、山を下りました。家来は山を下つて、海辺へきて、毎日その海岸を通る船を見ているのであります。けれど、一そうも目にとまりません。毎日、毎日、沖の方を見ては、通る船を見えますうちに、そのかいもなく、ふと病にかかつて、それがもとになつて、遠い異郷の空でついに死なくなつてしまいました。

三

「それからどうなつたかい。」

と、甲こうが丙へいに尋たずねました。

「これで、もうお話はなしは終おわつたんだよ。」

丙へいが星ほし晴ばれのした空そらをながめて答こたえました。

「その家来けらいは死しんでしまつたから、天子てんしさまも死しんでしまつたんだね。」

と乙おつがいました。

「それはそうさ、天子てんしさまも不ふ死しの薬くすりを飲のむことができなかつたから、やはり年としを老とつて死しんでしまいなされたろう。」

と丙へいがいました。

「ばかだね、その家来けらいは自分じぶんもその薬くすりを飲のんで、そして天子てんしさま

へも徳利とくりの中へ入れて持つてゆけばよかつたのに。そうすれば二人ふたりとも死しななかつたろうに。」

と、乙おつが考かんえながら家来けらいの智慧ちえのないのを笑わらつていいました。

「だって、天子てんしさまより先に飲のむのは不忠ふちゆうと思おもつたかもしれないさ。」

と甲こうがいいました。

三人にんは、かしの木きの下したに腰こしを下おろして、西南せいなんの国境くにぎかいにある金峰仙きんぶせんの方ほうを見みながら、まだあの高たかい山やまの嶺みねには不ふ死しの泉いずみがあるだろうかというようなことを話はなして空想くうそうにふけりました。

星ほし晴はれのした夜よるの空そらに高たかい山やまのどがった嶺みねが黒くろくそびえて見みえま
す。その嶺みねの上うへにあたつて一つ金こん色じきの星ほしがキラキラと輝かがやいてい

ます。

三人の子供らは、よく祖母や、母親から、夜ごとに天からうそくが降つてくるとか、また下界で、この山の神さまに祈りをささげるろうそくの火が、空を泳いで山の嶺に上るとかいうような不思議な話を胸の中に思い出しました。

「神さまというものはあるものだろうか。」

と、もつとも年少の丙が、たまらなくなつてため息をしながらいいました。

「学校の先生はないといったよ。」

と、乙が教師のいったことを思い出していました。

「先生はどうして、ないことを知っているだろう。」

と、甲こうが乙おつのいつたことに疑うたいをはさみました。

「僕ぼくはあると思おもうよ。そんなら、だれがあほしの星ほしや、山やまや、この地ち球きゆうや、人にんげん間かんを造つくつたのだろう。」

と、丙へいが輝かがく瞳やひとみを星ほしに向むけて涙なみだぐみました。夜よるの風かぜに吹ふかれて、かしの木きがサワサワと鳴なっています。

「そして、だれがこの人にんげん間かんを造つくつたんだろう。」

と、丙へいが声こえを慄ふるわせて叫さけびました。

三人にんはしばらく黙だまって、深ふかく思おもいに沈しずんでいましたが、

「不思議ふしぎだ。」

といい合あいました。

すでに北ほつこく国こくの夏なつの夜よはふけてみえました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「日本少年 臨」

1914（大正3）年9月

※表題は底本では、「不死《ふし》の薬《くすり》」となつています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年12月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

不死の薬

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>